

## 「問題」

以下の文章は、ある本の序章の一部である（文末参照）。この文章を読み、明治末期以降の「知識人」と一般の人々との関わりについて四〇〇字程度で要約しなさい。次にこの点について、現代日本社会に生きるあなた自身の視点から自由に論じなさい。

本書は、「知識」・「思想」の「生産、流通、消費」のうちでも、主として、「生産・流通」に直接関わった人々を念頭におくが、単に消費にのみ関わる、より広範な人々の存在も無視できない。そのような人々に関しては、「知識階級」、「知識人」の類縁語である「インテリ」という言葉を当てるのが適当かもしれない。しかしながら、「インテリ」にしても、「知識階級」、「知識人」の有した関心を共有する点で「インテリ」たり得たのであり、その意味で、広義の「知識階級」、「知識人」に含めて考えてよいかと思われる。

なお、「知識」・「思想」については、言葉で明示的に語られた観念ないし、それを体系的に展開したものであるという具合になるだけ広く解したうえで、さらに、付け加えるのであれば、それが、旧制高等学校・大学のような高等教育機関に所属することで、あるいは、それを契機として習得され、それを基礎として発展させたものといった条件を考えておけばよいであろう。「知識」と「思想」の相違については、厳密に区別することは困難であるが、前者が主として価値中立的・技術的態度によってなされる知的活動の所産、後者を人生や社会に対して規範的な見地から、そのしかるべきあり方や方向を示すものといった程度に理解しておこう。それ以上に、「知識」・「思想」の自身にわたって厳密に定義していくと、「知識」・「思想」の内部の、さらにどのような領域に関わる人々を「知識人」、「知識階級」と呼ぶのかという問題がいたずらに錯綜（さくそう）すると思われるからである。

さて、このような大雑把な定義で始めるとしても、このことで、問題が単純になるわけではない。というのも、「知識階級」、「知識人」が「知識」・「思想」

を生産し流通させる存在であるとしても、そうした「知識」や「思想」といったものが、そもそも、なにゆえに、そして、どのような意義を持つのか、そして、そのようなものに関わることが、誰のどのような関心や利益に寄与するのかということが、様々な論点に関わらせて常に問題とされ、様々な「知識人論」と呼ばれる言説を生み出してきたからである。そして、実を言えば、「知識階級」とか「知識人」という言葉そのものが、まさしく、そのような問題意識を担いながら登場してきた言葉だったのである。

「知識・思想の生産流通に関わる人」は、（中略）明治期にも、江戸期にも存在した。にもかかわらず、「知識階級」や「知識人」という言葉が存在しなかった当時においては、そのような「知識」・「思想」の価値、さらに、それに関わる者の社会的存在意義が、いくつもの例は別としても、一般に後に見るほど切実に意識され議論されることはなかった。「知識」・「思想」が有意義なものであるということは、自明の前提であった。しかるに、明治末から大正期を経て、「知識階級」、「知識人」という言葉が成立していくことと平行して、「知識」・「思想」の意義が様々な観点から次第に問題とされるようになり、それと平行して「知識階級」、「知識人」の存在意義ということが、鋭く意識されるようになっていったのである。

それは、ひとつには、明治末期以降、「知識」・「思想」というものが、通常の人々が日々営んでいる現実の生活から何がしか距離を置いたもの、すなわち、それを「超越」するもの、あるいは、そこから「遊離」したものであるというイメージが広がっていったためである。「知識人」が担う「知識」・「思想」に対するこのようなイメージは、この時期以降、今日に至るまで、多くの「知識人」の念頭を占めてきたもので、たとえば（中略）吉本隆明は、この点に関して、次のように述べている。すなわち、「知識人」とは、「生活次元のくりかえしにまつわる思考しきしないところからとびだしていつて、大なり小なり抽象的なことをかんがえることができ、また大なり小なりじぶんと直接にかかわりない、つまり眼にみえてかかわりのない問題についてもものごとをかんがえ、発展させていくことができる者」であるのに対して、「大衆」とは、「自己の生活のくりかえしの範囲でしかじぶんのかんがえを動かさない」存在である（『国家・家・大衆・知識人』、昭和四十一年）。

このような「知識」・「思想」と現実生活との距離をどう評価するかで、「知識人」に対しても、次のような相異なる二つの立場が生まれることになった。

すなわち、一方では、「知識」・「思想」というものを、日々の生活の素朴な体験を越え出した新しい豊かな世界を開いてみせるものであると捉えて、そこから、「知識人」は、「知識人ではないもの」、すなわち、吉本の言う「庶民」とか「大衆」といったものに「知識」・「思想」を伝達するような啓蒙的な役割を果たすべき有意義な存在だという立場が生まれ、他方では、「知識人」の有する「知識」・「思想」は、「知識人でないもの」の日常に関わらないがゆえに、本来、その意義が希薄で曖昧なものであるという立場が生まれてくるのである。

しかも、こうした二つの立場は、それぞれ別の人々によって代表されているというよりも、むしろ、多くの「知識人」の心中において、いわば裏表の関係になって並存しており、彼らの心理に微妙な齟齬を与えていたのである。すなわち、「知識人」が、日常性を越えた「知識」・「思想」を有するということが、一方では、彼ら自身の優越感や彼らへの社会的尊敬の念の根拠となりながら、他方で、彼らの「知識」・「思想」の現実生活からの「遊離」が、そうした「知識」・「思想」の有効性への懐疑を呼び起こし、「知識人」への批判や「知識人」自身のコンプレックスを形作ることになったのである。上に引いた吉本が、続けて、「知識人」を「余計なことをかんがえることができる能力」の持ち主と呼んでいることも、この間の事情を物語っている。すなわち、「知識人」への評価をめぐる相矛盾する立場にどのような折り合いをつけるのか、すなわち、「知識」・「思想」のしかるべき望ましいあり方というものはどういうものか、「知識人」と「大衆」との関係とはどうあるべきかという関心こそが、先に述べた多くの「知識人論」の共通のテーマとなっていたのである。

それでは、何故、明治末期以降になって「知識」・「思想」というものの意義が切実に意識されるようになったのであろうか。まず、考慮しなければならぬのは、近代日本の社会において、「知識」・「思想」と呼ばれるものの多くが、明治以来、西欧伝来のものであり、それゆえ、もともと、日本社会の一般的な生活条件やそれにまつわる多くの人々の意識から、どこか「遊離」する面があったということである。この点に関して、柳田國男は次のように述べている。「私は学校に居る時分、外国の本で経済学を教へられた人間だが、今日に至る迄も実は本と自分の生活とが、はだくになつて繋ぎ合されぬに困つて居る。さういふ風の教育が、若しや今でもこの事件の多い農村の生活を支配し

て居るのでは無いか」と(『青年と学問』、昭和三年)。すなわち、西欧伝来の知識と一般日本人の生活とが、どこか「はだく」なところ、すなわち、そぐわない面があったと述べているのである。柳田がこの文章を記したのは昭和初期であり、この時期において、柳田は既に、ここに述べられたような認識に立つて、民俗学の探求——一般の日本人、とりわけ当時の多数の人々を占めていた農山村の人々の生活を事実として支えている習慣や生活の知恵といったものの探求に乗り出していたが、興味深いのは、柳田がこのような試みに本格的に着手するのが、「知識階級」という言葉の誕生を準備しつつあった明治末から大正期にかけてであるということであり、いま引いた文章を記した時期においては、柳田自身が、まさしく、「インテリ」と「平民」とを区別して、前者が有する「知識」というものの意義に懐疑を投げかけ、自らの試みを「平民の過去」の探求と捉えていたのが、まことに示唆的である(『郷土生活の研究法』、昭和十年)。

とはいえ、文明開化から、おおむね日露戦争が終了するまで、何よりも西欧的な社会を建設することを重要な課題としていた時期の日本にとつては、こうした西欧伝来の知識は、近代社会にふさわしい政府の仕組みを作り上げたり、銀行や会社、学校といった諸々の制度や組織を建設したり、さらには、そこで営まれる業務の基盤を整えるに際して、文字通り直ちに役立つものとして存在していた。すなわち、日本の社会の西欧化、そして、そのことによる日本の国際社会における地位の安定ということが、最重要の課題とされている限り、西欧伝来の知識は、少なくとも天下国家のレベルで有用なものであることは明らかであり、また、そうした知識を所有している人々も、自己の社会的な存在意義について疑問を抱くことはなかったのである。

(出典)『坂本多加雄選集——近代日本精神史』(藤原書店、二〇〇五年)